

労働者の監視と自由

ー釜ヶ崎監視テレビカメラ事件からー

梶 嘉維介

本卒業論文では監視社会をテーマに取り上げ、寄せ場の日雇い労働者に対する差別や社会的排除の視点から釜ヶ崎について論じる。釜ヶ崎監視テレビカメラ事件によって釜ヶ崎に大量の監視カメラが設置されていたことが明るみになった。それは、警察が寄せ場日雇い労働者による暴動を取り締まる手段として監視カメラを設置したためである。監視が始まった 1960 年代から寄せ場の日雇い労働者に対する差別意識や社会的排除の動きが活発化していった。そこで、先行研究をもとに監視カメラ設置が進んだ経緯がこの寄せ場への差別意識などによる要因ではないかと考えた。1950 年代から釜ヶ崎への差別や偏見が存在し、その後はマスメディアなどを通じて共通認識として周辺地域で共有された。そして行政が家族持ち日雇い労働者や湾港労働者を優遇し各地へ分散させたことによって釜ヶ崎に取り残された寄せ場日雇い労働者を市民社会から切り離し制度的に隔離に監視を用いるようになった。